

「世間」・「出世間」の問題提起

千 明 東 道

(1) 問題の所在

『法華経』第三章「譬喻品」(S. P.; Chap. III)において小乗(Hinayana)と大乘(Mahayana)の問題が論議されている。そこでは、声聞(Srāvaka)と独覚(Pratyekabuddha)辟支仏(縁覚)は、自利のみを求めるHinayana「小乗」の人々であり、菩薩(Bodhisattva)・摩訶薩(Mahāsattva)は、自利利他を求めるMahāyāna「大乘」の人々であると説示されている。更に、これらの人々が等しく如来の教誡に専念し、「さとり」の境地を求めるのは、全て衆生輪廻の三界(Tridhātu)から度脱する為であると解釈されている。〔Ⅰ〕Srāvaka. 「声聞」〔Ⅱ〕Pratyekabuddha. 「独覚」〔Ⅲ〕Bodhisattva, Mahāsattva 「菩薩・摩訶薩」〔Ⅳ〕の場合には、「声聞」の乗り物を求めて三界を度脱するというものであり、〔Ⅱ〕の場合には、「独覚」の乗り物を求めて三界を度脱するというものであり、〔Ⅲ〕の場合には、「大乘」を求めて三界を度脱する故に「菩薩・摩訶薩」

と呼ばれるというものである。つまりは、声聞も独覚も大乘も等しくTridhātu「三界」から逃れ出ることをその目的としており、三界度脱の手段と方法において自利のみを求める小乗と、自利利他を追求する大乘の差異が生ずることになるのである。

(2) 世間と出世間

それでは、衆生輪廻の三界(欲界・色界・無色界)を度脱した世界とはどのような世界であろうか。ここに、Tridhātu「三界」とBuddha-dhātu「仏の世界」(仏界)との関係性を、「世間」と「出世間」との関係として哲学的宗教的に究明すべき問題提起がなされているのである。

これらの問題提起における解釈の為の参考資料として、哲學的宗教的にも発展し完成した形態を持つ大乘論書にその説示を求めてみよう。後期大乘仏教の伝承において西藏で弥勒菩薩の『五部論書』とされている『法法性分別論』『中辺分

別論』『現觀莊嚴論』『大乘莊嚴經論』『宝性論』(Dharma-dharmatā-Vibhāga, Madhyānta-Vibhāga, Abhisamaya-Alankāra, Sūtra-Alankāra, Ratnagotrā-Vibhāga)の二論について検討と考察を加えた結果次のような事実が確認された。

まず、瑜伽唯識思想を説く Sūtra-Alankāra 『大乘莊嚴經論』には、「世間」と「出世間」について三種の闡説が見られる。

- ① Loka 「世間」……「真実品第六」「菩提品第九」「述求品第十一」「教授品第十四」「覺分品第十八」
- ② Lokōtara 「出世間」……「度授品第十六」「供養品第十七」
- ③ Lokōtara-jāna 「出世間智」……「供述品第十一」「覺分品第十八」

次に、如来藏思想を説く Ratnagotrā-Vibhāga 『宝性論』には、「世間」と「出世間」について、やはり三種の闡説が見られる。

- ① Loka 「世間」……「如来藏品第一」「菩提品第一」「功德品第三」「仏業品第四」「信勝益品第五」
- ② Lokōtara 「出世間」……「如来藏品第一」「功德品第三」「仏業品第四」
- ③ Lokōtara-jāna 「出世間智」……「如来藏品第一」「菩提品第一」

F. Edgerton. の B. H. S. D. にある Lokā-uttara は、Super-World と解釈されている。南伝 Avadana では、「世間心」と

「世間」・「出世間」の問題提起(千 明)

「出世間心」として解釈されており、「心」Citta の側面より考察されている(Diṅyāvadana 161. 25)。

(3) 両重の出世間

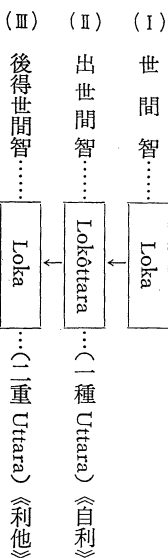
Loka 「世間」と Lokōtara 「出世間」との相違が Uṭṭara すなわち究竟されているか否かにあることを考えるとき、Uṭṭara の語の持つ意味は極めて重要となってくる。原始仏教の因果論において、三世両重の十二因縁が説述されているが、この方法論と「世間」・「出世間」の論理を比較するならば、次のような考察が可能となる。すなわち、「世間」から「出世間」へと向う方向性の宗教的哲学理論のもとに、更に「出世間」から「世間」へと転回する宗教的行動理論を構築することが可能となるのである。これらの Action Theory 「行為理論」は、「一重の出世間」《世間から出世間へと向う宗教的哲学理論》「二重の出世間」《出世間から世間へと向う宗教的行動理論》として考察することができる。この「二重の出世間」理論は、過去・現在・未来に亘って転回される時間的・空間的な流動サイクル(CYCLE)において説明されねばならぬ。

(4) 自利と利他

『大乘莊嚴經論』(S-A)には、「出世間智」(Lokōtara-jāna)

「世間」・「出世間」の問題提起（千 明）

及び「出世間後得智」(Lokōttara piśa labdhāṃ laukikam)の二種の智が説かれている。ここに説く「自らの諸仏法を清める出世間智」とは、上求菩提の究竟として得られる「自利満足」であり、「衆生を成熟せしめる出世間後得智(出世間後世智)」とは、下化衆生の究竟として得られる「利他満足」に他ならない。同論(S-A XIV p. 96)に「上求菩提の究竟である出世間智は「究竟の転依」であると述べられている。これについて、『宝性論』(R-V)では「世間・出世間の智とは「転依の因」であり「逮得」の語で示されるものであると解釈されている。それでは「世間智」から「出世間智」へ、更に「後得世間智」へと転回されるこれらの修行論の意味するものは何なのであろうか。それらは「二重の Uttara (究竟)として考察することができる。すなわち、



右図で、一重 Uttara の意味するものは上求菩提の究竟であり、「二重 Uttara の意味するものは下化衆生の究竟にはかならない。

仏教では、「三世両重の十二因縁」に示されている如く存

在論における因果関係において、或いは、過去・現在・未来に亘っての時間的・空間的な転回論において、常に止まることのない循環活動 (CYCLING ACTION) が要求されている。そして、このことは、「等閑」の「自利」の「信仰」「利他」の流動サイクルとして解釈されねばならぬ。

- 1 『法華経』(S, P) の「声聞」Śrāvaka 解釈
Ta ucyante śrāvaka-yānāma alāṅkṣamāṇas-*trādhātukān* nir-
dhāvanti. (Śrāvaka)
- 2 『法華経』(S, P) の「独覺」Pratyekabuddha 解釈
Ta ucyante pratyekabuddha-yānam alāṅkṣamā-*trādhātukān* nir-
dhāvanti. (Pratyekabuddha)
- 3 『法華経』(S, P) の「大乘」Mahāyāna 解釈
Ta ucyante mahā-yānam alāṅkṣamāṇas-*trādhātukān* nir-
dhāvanti tena kāraṇenocyante bodhisattvā mahāsattvā iti. (Bo-
dhisattva, Mahāsattva)
- 4 『五部論書』Maitreya の「法」Dharma 解釈
(a) Dharmadharmatā-Vibhāga. 『法法性分別論』「般若中觀思想的」解釈
(b) Madhyānta-Vibhāga. 『中辺分別論』「瑜伽唯識思想的」解釈
(c) Abhisamayā-Ālamkāra. 『現觀莊嚴論』「般若中觀思想的」解釈
(d) Sūtra-Ālamkāra. 『大乘莊嚴經論』「瑜伽唯識思想的」解釈
(e) Ratnagotra-Vibhāga. 『宝性論』「如来藏思想的」解釈
- 5 Action Theory 「行為理論」の参考資料
(a) Structure of Social Action. (T. Parsons.)
(b) The Social System. (T. Parsons.)
(c) Working Papers in the Theory of Action. (T. Parsons, R. F. Bales, E. A. Shils.)
(d) Sociological Theory and Modern Society. (T. Parsons.) (妙観文庫研究所)